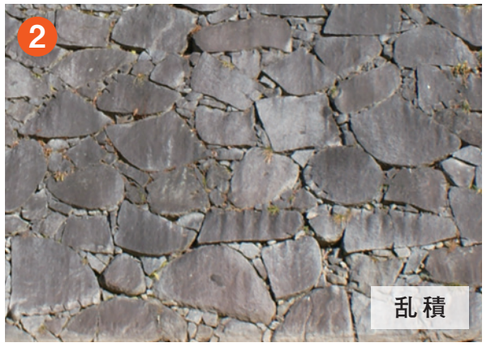


三角錐形の立石

本丸西壁出隅にある三角錐の角石。当時、石垣を積んだ石工職人の匠の技だろうか。

※石割ケヤキ

花崗岩の巨大な転石。石垣と接しており、この巨石も天然の石垣として扱われていた可能性がある。

※「史跡盛岡城跡　植栽管理基本計画」より

城内に残る残念石

毘沙門橋付近に矢穴の開いた花崗岩が残されている。石垣として陽の目を見ることがなかった残念な石。

マップ提供：もりおか歴史文化館（一部改変）

ハバキ石垣

寛延元年（1747）に設置された石垣の崩壊を防ぐ応急処置の低石垣。藩の財政状況により修復は叶わず、ハバキ石垣が取り付けられた。

石垣の変遷がわかる場所

❼：本丸東部石土居
❽：吹上門坂道石垣

明治時代の公園整備時に新しく付加された石垣や、近現代に修復された部分は、V字状に積む谷積となっている。

淡路丸南西部石垣

昭和・平成の大修理で修復された高石垣。傷ついて新しい石に交換されたものはわずか数石だった。

盛岡城 石垣発見MAP!!

盛岡城には築城当初の江戸時代初期から、その後の増改築の間に積まれた様々な石垣が良好に残っていることが大きな特徴のひとつです。お城に石垣があるのは当たり前で、建物がない寂しいお城だと感じるかもしれませんが、東北地方を見渡しても城内の主要な曲輪（本丸・二ノ丸・三ノ丸・淡路丸・榊山稲荷曲輪等）を総石垣で囲んでいるのは珍しいことです。

この石垣MAPを持ちながら、江戸時代の石垣に思いを馳せてみましょう。

■盛岡城の石垣の特徴■

盛岡城の石垣に使用されている石材は花崗岩です。ほかのお城と大きく異なるところは石材調達方法です。ほとんどのお城では、遠くの石材産地から石を切り出して運んでいましたが、盛岡城の築城期は城内を整備する段階で、地中から出てきた花崗岩を使用していました。さらに盛岡城近郊の丘陵地帯である日蔭山にも石垣の石材となる花崗岩が分布しており、石垣造りには非常に適していた場所だったといえるでしょう。

いわゆる江戸時代の地産地消であり、その証拠に盛岡城の石垣には、双子石と呼ばれる卵を輪切りにした両側のような石の組み合わせが散見されます。これは石垣に使う石材を積む直前に割ったことを示しており、遠方から石材を切り出し、加工して運搬する必要がなかったということです。さらに城内の毘沙門橋近くには、現在でも矢穴（石を割るくさびを打ち込むために掘られた穴）が掘られた石が切り出されることなく残された「残念石 14」や、花崗岩の露頭を見ることができます。

毘沙門橋周辺の花崗岩露頭

日蔭山の花崗岩

◇石垣の分類◇

石垣は、積み方による分類と石材の加工方法による分類の２つの分類の仕方があり、さらに数種類かに分類されます。

【積み方による分類】

○乱積・・・大きさの異なる石で、横方向の列が乱れている（目地が通っていない）積み方。盛岡城で最も面積の多い積み方。2

○布積・・・同程度の大きさの石で、横方向に列が並んだ（目地が通った）積み方。3

○算木積・・石垣のコーナー部分の積み方。長方形に整形された石を長辺と短辺が一段ごとに互い違いになるようにする積み方。加重を支える重要な箇所。4

○谷積・・・築石を斜めに積み上げる積み方。落とし積みとも言う。主に江戸時代末期以降に見られる。5

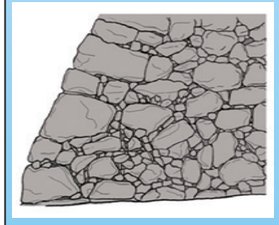
【石材の加工有無や加工方法による分類】

○野面積・・自然石（野面石）を加工せずに積み上げる方法。石垣が登場し始めた頃から使われていた。1

○打込接・・石と石の接する部分を打ち欠いて加工し、隙間に間詰石を入れながら積み上げる方法。

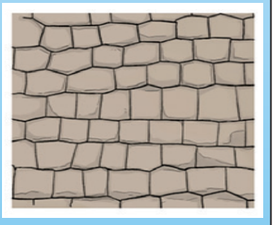
○切込接・・整った形に整形した石を使って隙間なく積み上げる方法。

イラスト　かみゆ歴史編集部／お城情報ＷＥＢメディア「城びと」



野面積

打込接



切込接

（古）→（新）

編集・発行：盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13-1
TEL 019-635-6600　FAX 019-635-6605

印刷：株式会社阿部印刷
〒020-0873　岩手県盛岡市松尾町2-2
TEL 019-624-2242　FAX 019-624-0177

遺跡の学び館HP

番請奉行銘石 10 11

普請奉行銘石とは、その石垣を積んだ普請奉行の名前と石垣の積上げや修復に関する年月日が刻まれた石のことです。

「三ノ丸北西部北面」、「二ノ丸南西側西面」、「淡路丸南西側西面（吹上坂）」の３ヶ所に存在していますが、現在、目視できるのは三ノ丸と二ノ丸の２つの石です。淡路丸の奉行銘石は明治に入り、岩手公園開園時（明治39年開園）の坂道嵩上げで地中に埋もれてしまいました。江戸時代には「城は幕府からの借り物」という考えがあったので、奉行とはいえ一家臣であり、大名でない者の名前を刻んでいることは全国的にも非常に珍しいことです。

奉行
野田弥右衛門
貞享三　丙寅歳　三月吉日
※貞享三年（1686年）

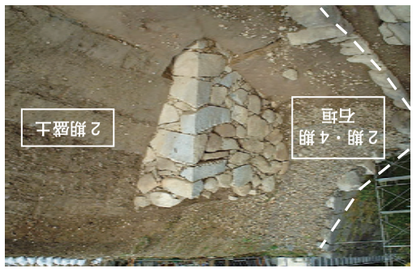
奉行
野田弥右衛門
三宅田弥五兵衛
寶永二　乙酉歳　九月二日
※宝永二年（1705年）

石垣の中から石垣が!? 15

いま私たちが見ている石垣は、築城当初からこのような姿ではありませんでした。

本丸南西部石垣の解体修復工事の最中に、石垣の中から一回り小さい石垣の隅部が発見されました。この石垣は盛岡城1期（築城期）のもので、その後の本丸を拡張する際に、1期の石垣をそのまま覆うようにして石垣が築かれました。

（現在は見ることができません。）



石垣内部から発見された
盛岡城1期の埋没石垣

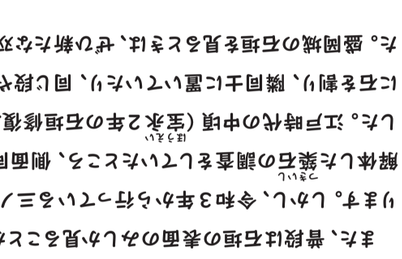
「刻まる（ふたごいし）」

盛岡城の石垣を見ていると、卵を半分に輪切りにしたような２つの石の組み合わせを見ることがあります。これは１つの石を半分に割ったもので、「双子石」と呼ばれています。他の城郭では発見例が少なく、盛岡城の大きな特徴です。石の形や矢穴の数、形、深さなどが一致しますが、すべて同じ向きで積まれているわけではなく、斜めに回転したり、逆さまに積まれている場合もあります。

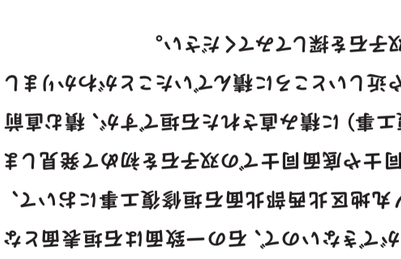
また、普段は石垣の表面のみしか見ることができないので、石の一致面は石垣表面となります。しかし、令和３年から行っている三ノ丸地区北西部北面石垣修復工事において、解体した築石の調査をしていたところ、側面同士や底面同士での双子石を初めて発見しました。江戸時代の中頃（宝永２年の石垣修復工事）に積み直された石垣ですが、積む直前に石を割り、隣同士に置いていたり、同じ段や近いところに積んでいたことがわかりました。盛岡城の石垣を見るときは、ぜひ新たな双子石を探してみてください。

三ノ丸南東部石垣 1

三ノ丸東部石段脇石垣 2



解体石垣１段目の隣り合った築石



矢穴一致状況